

ブックガイド



寄席切絵図〈新装版〉

六代目三遊亭圓生著

大正12年の関東大震災は、それまで残っていた「江戸」の街並み、風景を一変させてしまった。震災まえは東京15区の市内だけで90軒、全国では190軒の寄席が栄えていた。本書は六代目圓生が当時をふり返り、それぞれがどういう寄席で、主人はどんな人であったかなどが語られている。場所を説明する語りには、持ちネタの多さを誇る圓生の技群の記憶力がよくあらわれている。

『寄席育ち』『寄席楽屋帖』『明治の寄席芸』に続く〈圓生四部作〉の改版の完結である。「この四部作を残してくれたことは、落語伝承の今後のため、どんなに助けになることか知れない。」と述べるのは編者の山本進氏。詳細な地図の作者は喜多川周之氏である。(A5判・303頁・3000円・青蛙房)

日本書紀はなにを隠してきたか

遠山美都男著

日本最古の歴史書『日本書紀』は、倭国の歴史を律令国家に相応しいものに書き換えるための歴史ドラマであったと主張する著者は、特に7世紀の記述に大いに疑問をもっている。それらは聖徳太子の登場から大化の改新、壬申の乱、白村江の敗北などの歴史的出来事であるが、本書では、それが実在したものであるのか、という大胆な問いかけまで行っている。

例えば聖徳太子であるが、さすがに聖徳太子虚構説は採用しないが、『日本書紀』に登場する聖徳太子は、『日本書紀』編纂時に皇太子の地位にあり、理想の皇太子になるためのマニユアルを必要とした後の聖武天皇のために書かれたものであったと言い、大化の改新における中心人物は中大兄皇子ではなく、ほんとうは軽皇子であったことを明らかにしている。恐らく、教科書の記述に親しんできた論者にはショッキングな内容であるが、これらの記述は十分な説得力をもっている。(B40判・253頁・780円・洋泉社)

個人情報を守るために

顔死のプライバシーを救い、監視社会を終わらせよう

佐藤文明著

政府は本年3月、「個人情報保護の保護」を民間に広げ、従来の「個人情報保護法」の欠陥を補うことを大義名分に、「個人情報保護基本法」の上程を閣議決定した。この法案には「政府にマスコミを規制する足場を与える」ものだととして、マスコミ各界から強い反対の声が寄せられていたのに、なぜ法案成立が急がれねばならないのか。



本書は、この動きに対し、法案の問題点を指摘しながら、それが成立すれば「国際基準をクリアーした包括的個人情報保護法の成立を、絶望のかなたへ追いやる」ようになる」と明確に反対の意思を示し、あわせて、プライバシーと人権、盗聴法や住民基本台帳システムの問題点や個人情報保護の防衛法などをQ&A形式で解説する。(B6判・251頁・1900円・緑風出版)

よみがえる浦島伝説

恋人たちのゆくえ

坂田千鶴子著

浦島太郎のお話といえば、海岸でいじめられていた亀を助けた浦島が、乙姫の住む竜宮城に招かれるという亀の報恩譚として知られている。ところが、この話の起源となった『丹後国風土記』に登場する浦島子伝説とは、日本の皇子・浦島子と中国の皇女・乙姫のラブストーリーとなっている。

ではなぜ、国境を越えたラブストーリーが報恩譚に変わってしまったのだろうか。著者は浦島子伝説の最初の形を『丹波国風土記』から紹介し、その時代に女性の純愛を尊ぶ文化があったこと、母系制の招婿婚が愛の理想とされていた事実を見つけ出していく。だが、そのような風土は統一国家形成に向けた流れのなかで排除されることとなり、浦島子伝説も変化させられていくのだが、ここではさらに踏み込み、この伝説の変化を女性の地位の転落としてとらえ、今こそ本来の浦島子伝説を復権する必要があるのではないかと呼びかけている。(B6判・32頁・2000円・新曜社)